

伊右衛門狸（いえもんだぬき）（津名町大町）

津名町大町の木曾（きそ）の原と言えば、小高い山に囲まれた所で、そこには昔から、いろんな狸が住んでいました。中でも伊右衛門狸と、その妻のおよいの話が有名です。

この夫婦狸（めおとだぬき）は、人なつっこく、あいきょう者でしたが、仲間の狸たちが、人間さまを化（ば）かした手柄話を、とくいになって語るものですから、伊右衛門も、とうとうやる気になってしまいました。

妻のおよいが止（と）めるのも聞かずに、人の良いじいさんを化かしたのがおもしろくて、とうとう止（や）められなくなり、月夜の晩には、道の側の木に登っては、通る人を化かして喜んでいました。

村人たちも、伊右衛門の素振（そぶり）がおかしいぞと、しだいにあやしむようになりました。

「あの伊右衛門が化かすはずはない。」

「いや、このあいだ、隣のばあさんが化かされて、川に落ちこんだのは、あいつの仕業（しわざ）やて。」

「そうよ、一軒家のじいさんが、同じ道をぐるぐる回されたとき、後で気がついたら、伊右衛門が道案内しとったちゅう話だ。」

「一度、伊右衛門を、ぎゃふんと言わたらにや。」

こんな相談を聞くにつけ、妻のおよいは心配でなりませんでした。



今夜も月の出（で）を待ちかねて、伊右衛門は、いさんで洞穴（ほらあな）の我が家（や）を出かけ、木の枝に腰かけて、人の通るのを、今やおそしと待ちうけていた。

「さて、今夜はどうしてやろう。久しぶりに娘さんに化けてたぶらかしてやろう。なんせ、男ときたら、娘さんにはからっきし弱いからな。」

ひとり言をつぶやいていると、足音がして、山かげからゆっくり人が近づいてくる。

「あれ、見なれんやつだな。この人間なら、杖は手で持って、道の上を突（つ）いてくるのに、あいつは二本の杖を腰にさしてやがる。なあに、かまうもんか。」

ちょっと娘さんの身ぶりをしてみて、さて木の上から、ふうわり飛び降りようとしたところ、

「ええいっ！」

腹の底までひびき渡るような大声がしたと思うと、さっきの人が腰にさしていた杖が、まっ白く光りながら、伊右衛門めがけてさっときた。ふうわり飛び降りるはずのものが、どさんと落ちた。たちまち術は破れて、美しい娘さんどころか、あられもない狸の姿。

「あれれ…。」

と思った時に、上からおそろしく強い力で押えつけられて、「お助け。」の声も出ない。たった一つ、自由なしっぽで、押えつけてる手を、こちょこちょとなでると、やっとゆるめてくれた。

「お前が伊右衛門狸だな。」

「へ、へい。さようございます。」

「おれはな、清重（きよしげ）という侍（さむらい）さまだ。じつは、村人から、きさまの退治（たいじ）を頼まれてやってきた。少しばかりの術が使えるのを鼻にかけて、人間さまを化かそうとするとは許しがたきやつ。きょうは、この清重さまが、十二分に成敗（せいばい）してくれるわ。」

「めっそもない、どうかごかんべんを。」

そこへ、ことの成り行きを心配していた村人たちがやってきた。清重にさんざんやつつけられている伊右衛門を見ると、腹の虫も治まると共に、多少かわいそうにもなってきた。急を知って駈（か）けつけてきた妻のおよいも、一緒になって、「今後ぜったいにいたしませんから。」と詫（わ）びを言い、庄屋さんの取りなしで、やっと助けてもらいました。

その後、村人たちは、狸に化かされないように、夜道の一人歩きの時には、「清重さま、まかり通る。」と大声で叫びながら歩きました。

伊右衛門は、もう決して人を化かそうなどとは考えませんでした。木曾の原のほかの狸たちも、その声を聞くとおそろしくなり、とてもよう化かしたりはしませんでしたとさ。